

小學國史 卷一

図書 和図書 遡  
a 1 3 8 0 3 2 9 3 4 5 a  
福岡教育大学蔵書

T1A3  
26  
F85a





# 小學國史卷一目次

第一課 天照大神	一	第十二課 文武天皇	四十四
第二課 天孫降臨	四	第十三課 和氣清麻呂	四十六
第三課 神武天皇	七	第十四課 桓武天皇	五十二
第四課 崇神天皇 垂仁天皇	十一	第十五課 景澄及空海	五十六
第五課 日本武尊	十六	第十六課 藤原氏の攝政關白	五十八
第六課 神功皇后	二十二	第十七課 菅原道真	六十一
第七課 仁德天皇	二十六	第十八課 天慶の亂	六十四
第八課 佛教の傳來	二十九	第十九課 藤原道長	六十六
第九課 聖德太子	三十二	第二十課 前九年の役	七十
第十課 天智天皇	三十五		
第十一課 三韓の叛服	四十一		

## 緒言

一、本書ハ、明治三十三年八月十八日公布、文部省令及同年同月二十一日制定、小學校令施行規則ニ準據シ、修業年限四箇年ノ高等小學校歴史科ノ教科書ニ充テシガ爲ニ編纂シタルモノナリ。

一、本書ノ編次ハ、主トシテ繫説ノ體ヲ用キタリ。コレ教育學理ノ指示スル所ト、多數教育家ノ實驗セシ所トニ據レルナリ。

一、本書挿入ノ圖畫ハ、一二考據精確ナルモノヲ擇ビ、苟クモ想像ヲ加ヘズ、以テ生徒ノ確實ナル理解



會ヲ助ケンコトヲ期シタリ。

一、本書記載事實ノ正確ナルハ勿論、其ノ行文ノ如キ、專、簡易明暢ヲ旨トシタリ。

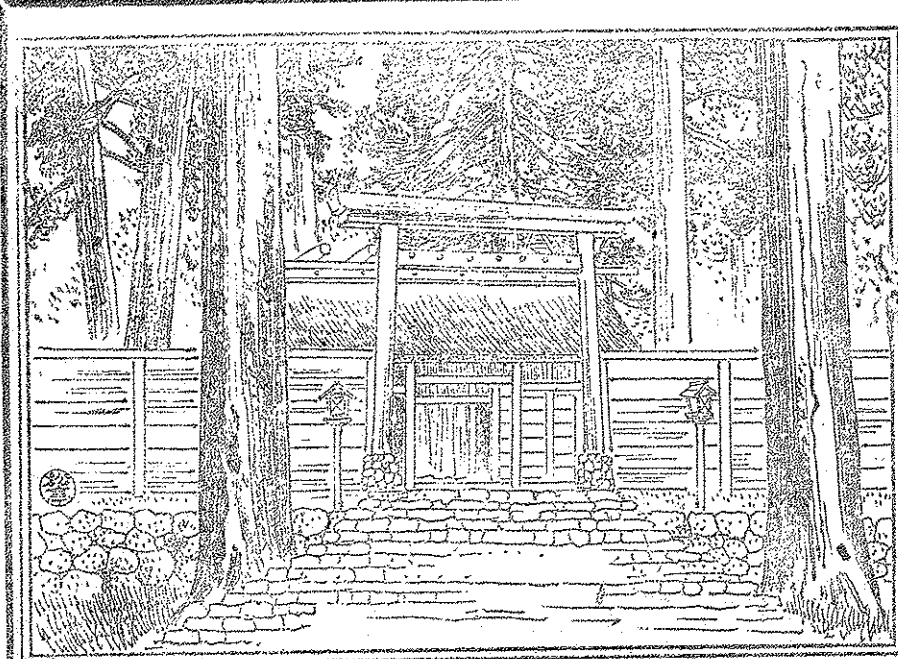
小學國史卷一

第一課 天照大神

世に「伊勢まるり」とて、人々のうちつれま  
うづる伊勢の大神宮は、わが 天皇陛下の、  
遠き御先祖にまします 天照大神を、まつ  
り奉れる御宮なり。

大神、御徳、極めて、高く、高天原を治め、田を  
耕して、穀物を取り、蠶を養ひて、絹をおり、安  
らかに、世をわたる道を、人民に、教へ給ひき。





伊勢の大神宮

然るに、大神の御第素戔鳴尊は、あらくしき行のみ多く、屢大神をくしめ奉りしかば、大神は遂に天石窟に入り給ひ、その戸をとぢて、出で給はざりき。

かくて、世の中は、眞の闇となり果てければ、諸の神たち、大に、これを憂へ、相會して、さまぐに評議したる上、八咫鏡・八咫瓊勾玉などをつくり、神をぬきもてきて、その枝にかけ、これを石窟の前に供へ、歌ひつ舞ひつして祈り申したり。

大神は、戸を細目にあけて、之をうかゞひ見たまひしに、かねて、戸のあきに待ち奉れる手力雄命、大神の御手をととりて、出し奉



りぬ。こゝに於て、天地、忽もとの如く、あかるくなれり。

素戔鳴尊は、この罪により、高天原を逐はれ、遂に、出雲國にいたり、簸の川上にて、八岐の大蛇を平げ、天叢雲劍を得て、これを、大神に獻じたまへり。この劍と、八咫鏡と、八咫瓊勾玉とをあはせて、三種の神器といふ。

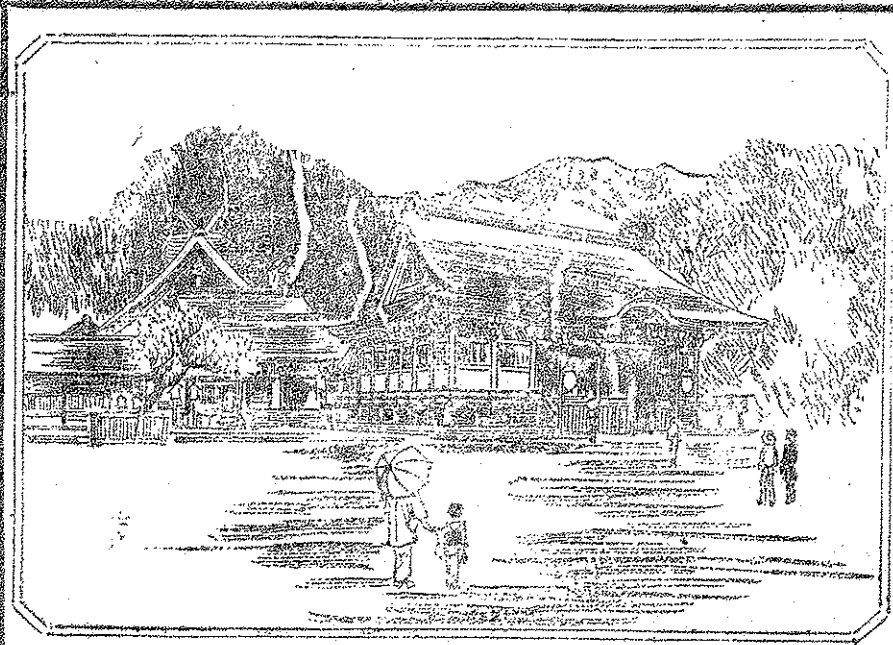
### 第三課 天孫降臨

素戔鳴尊の御子大國主命は、武勇すぐれ

し御方なり。父尊につぎて、出雲に居たまひ順はぬものどもを討ち平げ、川をさらへ、溝をほり、田畑をひらきなどして、よくその地方を治めたまひき。

こゝに、天照大神は、大神の御子孫を此の國の君となさんとし給ひ、まづ御使を出雲につかはして、國土をたてまつるべき旨を傳へさせ給ひしに、大國主命、謹みて詔を奉じ、遂に、自杵築宮に退隱せり。此の宮は、





出雲大社

即、出雲の大社なり。  
 大神、乃、此の國を  
 御孫 瓊々杵尊に  
 たまひ、皇位は天、地  
 とともに、きはまり  
 なかるべしと、のた  
 まひ、かつ、御手づか  
 ら、三種の神器を授  
 けて、此の鏡を視る

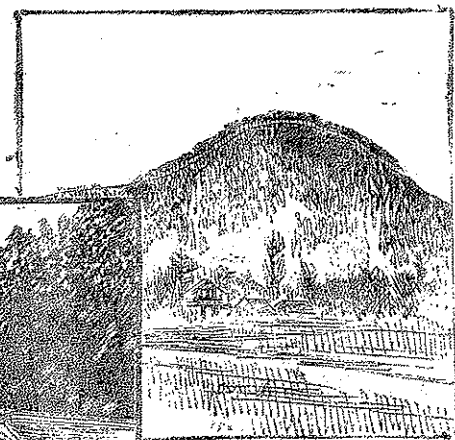
こと、われを視るが如くし、床を共にし、殿を  
 同じくしてまつるべしと、つげたまひぬ。

こゝに於て、天孫は、諸の神たちをしたが  
 へ、日向國高千穂峰に天降りましゝて、世  
 を治め給ひき。これより、天孫の御子孫、世々  
 相つぎ、神器を奉じて、天位にのぼり給ふ。

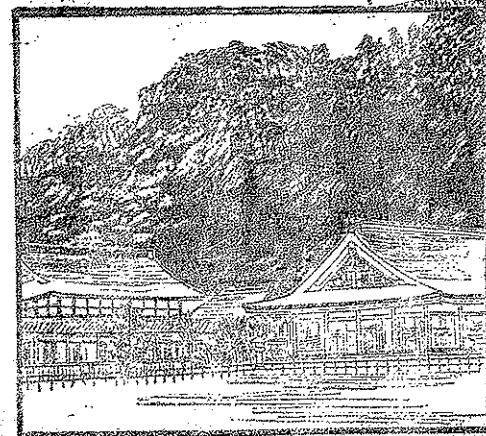
第三課 神武天皇

毎年二月十一日は、紀元節といふ。この日  
 は、人皇第一代 神武天皇の、始めて御位に





山 傍 殿



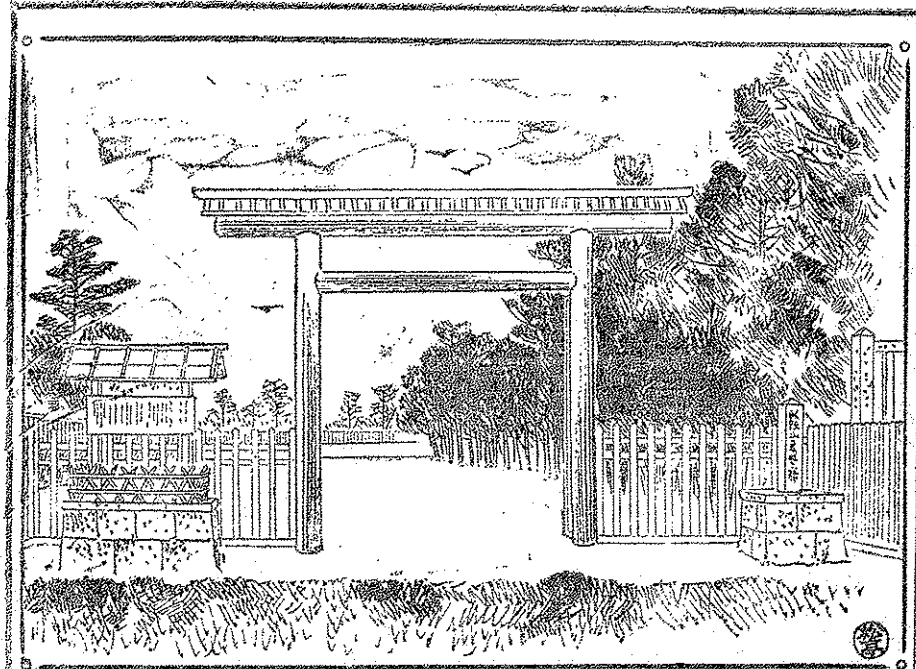
宮 神 原 經

即き給ひし吉日なれば、これを祝ひ奉るなり。

天皇は、天照大神五世の御孫なり。初め、日向におはせしが、東方、いまだ治らずして、人民、互にあらとひ居るよし

をきこしめして、之をしづめたまはんため、かつは東方によき國をえらび、其處にみやこして、全國を治め給はんがために、軍勢をひきゐ、九州より中國に向ひ攝津河内をへて、大和に入らんとし給へり。

大和には、あるもの數多居りしが、中には長髓彦サカスネヒコといふもの、勢最強く、天皇の御軍のいたれる由をきゝて、これを拒ぎければ、天皇は、途をかへて、紀伊より、更に大和に



歌 傍 御 陵

入り、長髓彦及其の  
他の賊をも平げた  
まひ、終に大和國檀カシ  
原宮ハラノミヤにて御位に即  
ぎ給へり。この年は、  
わが大日本帝國の  
紀元元年にして、こ  
とし明治三十三年  
をさること實に二

千五百六十年なり。

天皇は、かゝる大業を成して、大に我が帝  
國のもとるを定め給ひ、御在位七十六年に  
して、かくれ給ひぬ。御陵は、大和國畝傍山ノボリヤマの  
東北にあり。四月三日の神武天皇祭は、即、こ  
の御陵の御祭なり。

第四課 崇神天皇 垂仁天皇

第十代 崇神天皇は、あつく神々をあが  
め給ひ、治國の御志、いと深かりき。

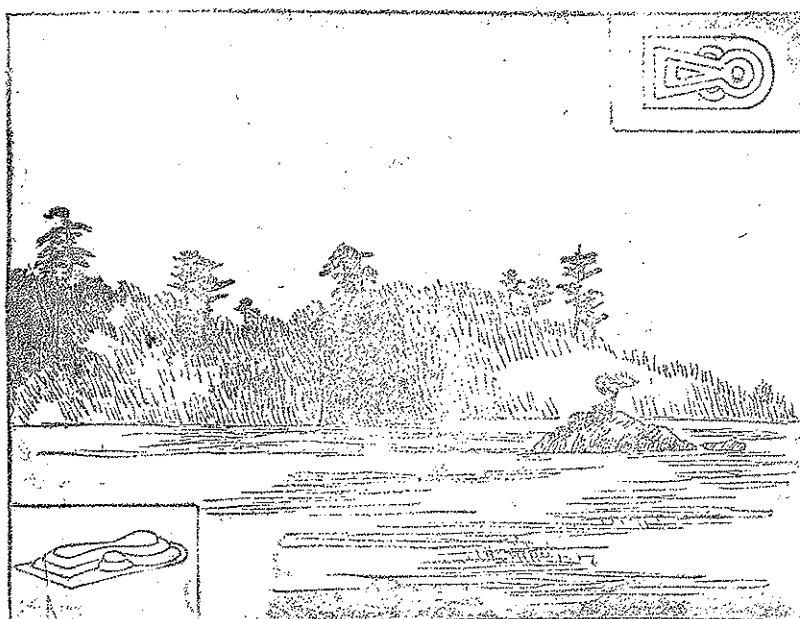


これまで三種の神器は、天照大神のおほせのまゝに、これを宮中に置き奉りしが、天皇はかくては、神威をけがさんおそれありとて、別に鏡・劍を模造せしめて、勾玉とともに、之を宮中にとゞめ、神授の鏡・劍をば大和の笠縫<sup>カサヌミ</sup>邑にうつしまつりたまへり。かくて、第十一代垂仁天皇の御時に至り、更に之を伊勢の五十鈴<sup>スズノ</sup>川上にうつしまつられき。即、今の伊勢の内宮なり。

この頃、遠き國々には、いまだ御威光に従はざるもの多かりければ、崇神天皇は、皇族のかたぐいを四方に遣はして、之を伐たしめ給ひき。四道將軍とは、これなり。

天皇、民をあはれみ給ふこと深く、諸國に船を造らしめて、運輸の便を開き、多く池溝を掘らしめて、水利を便にし、農業をすゝめ給ふことも、よく行きとゞきければ、國內富みさかえて、民皆、天皇の御恩徳を仰ぎ奉

圖面平陵御



圖面側陵御

陵御の皇天仁垂

て、貴人死する時は、その近臣をば、ともにう

りたり。

垂仁天皇は、また、

御心を民業にとゞ

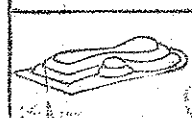
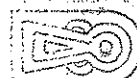
め給ひ、諸國に令し

て、池溝を開かしめ

られしこと、八百餘

所に及べりといふ。

むかしは、殉死と



づむる習ありき。

天皇、大に之を

あはれみ給ひ、詔

して、殉死を禁じ、

かの相模の元祖

とよばるゝ野見

宿禰の考により

て、生人に代ふる

に、土偶を以てし



物遺の代古



給へり。この土偶は、即、埴輪なり。埴輪には、人形の外、馬、鳥など、いろ／＼の形あり。今も、をり／＼、古き塚より掘り出さる。

第五課 日本武尊

第十二代 景行天皇の皇子に、小碓尊と申す御方おはしましき。たけ高く、力強くして、御心、いさましくおはせしが、御年十六の時、筑紫の熊襲とむきしかば、天皇は、この皇子に命じて、之を討たしめ給へり。

皇子、筑紫に下りて、ひとかに、熊襲のよすをうかゞひ給ひしに、をりしも、そのかしら川上梟帥カグサの家に、祝ひごとありしかば、皇子は、少女のすがたとなり、其の座にし、のび入り、梟帥が酔ひふしたるをうかゞひ、かくしもちたる、剣をぬきはなちて、その胸を、力のかぎりつき給ふ。梟帥、大に、皇子の武勇に感じ、苦しき息の下より、われ、未、かくも、雄々しき人を見ず。われは、賤しきものながら、よ



本日武尊川上皇帥を刺し給ふ

き御名を奉らん。今より日本武とよばせ給へ」といひ終へて、うせぬ。此の御名こそ、まことに、よく皇子の武勇を、たへ得たりといふべけれ。

皇子は、なほ、途す

がら、諸賊をうち平げて、歸り給ひしが、間もなく、東國の蝦夷、また、とむきければ、天皇、再、皇子に命じて、これを討たしめ給ひき。皇子、仰をかうむり、まづ、伊勢に至りて、神宮を拜し、御叔母倭姫命より、叢雲劍と、火打袋とを受け、進みて、駿河に至り給ひし時、その地の賊ども、皇子を、廣き野原に誘ひ、火をつけ、焼き殺し奉らんとせしかば、皇子、神劍をぬきて、あたりの草をなぎはらひ、火打を以



て、向ひ火をつけ、却りて、賊を焼き殺し給へり。これより叢雲劍を、草薙劍といひ、尾張の熱田神宮に祀れり。

皇子は、それより、相模に至り、御船にて、上總にあたり、遂に、進みて、蝦夷の境にまで至り給へば、蝦夷等、みな、皇子の威勢におそれて降りぬ。皇子、東國を平げ、歸りて近江にいたり、病を得給ひしかば、とりこを神宮に獻じ、部將をして、事のよしを天皇に奏せし

め、つひに、伊勢の、能褒野に薨じ給へり。御年三十二なりき。

皇子、東西の諸國を平げて、ひろく、朝廷の恩威をしきたまひ、御いさを、多かりしを以て、天皇、深く、これを、をしみ給ひき。

かくて、西も東も平ぎぬれば、天皇は、諸皇子を分ちて、諸地方を治めしめ、次代、成務天皇に至り、國・縣の界を正し、國造・縣主等を定めて、大に、地方の政をととのへ給ひき。

第六課 神功皇后

第十四代 仲哀天皇の御代に、熊襲、また、  
とむけり。天皇、皇后とともに、いでまして、  
征伐したまひしが、未、平ぐに至らずして、崩  
じ給ひぬ。

皇后は、御氣象、ことに、雄々しくおはしま  
しければ、大臣武内宿禰とはかり、まづ、新羅  
を征したまへり。新羅は、今の韓國の東南部  
にありし國なり。



韓國地圖

武内宿禰

この頃 韓國は、新羅、百濟、高麗、及、任那の四國に分れ居たり。任那は、崇神天皇の御代



に、既に我が國に、したがりしが、新羅は、わが國に最近く、熊襲を助けたるも此の國なれば、皇后は、まづ、之を征し給はんとして、親ら、兵を率ゐて、新羅に押しよせ給へり。

我が船の、彼の地につくや、新羅王、大に招きて降参し、永く日本の屬國となり、毎年、金銀・織物の類を、船八十艘につみて奉らんと約しかつ、日、更に西に出で、鴨綠江、逆に流れ、河の石、昇りて星となりぬとも、このちか

ひをやぶらじとど、ちかひける。後ほどなく百濟・高麗の二國も、來り附きければ、皇后、役人を其の國にとめて、軍をかへし給ひぬ。かくて、熊襲もおのづから平ぎぬ。皇后は、即、神功皇后なり。

これより、韓國との交通開け、第十五代應神天皇の御代には、百濟より王仁といふ學者來りて、論語と千字文とを奉りたり。その他、なほ裁縫・機織・鍛冶・建築等に通ぜるも

のも、おひく渡り來りぬ。

第七課 仁德天皇

第十六代 仁德天皇は、應神天皇の御子なり。天皇御めぐみ深くましく、ある時、高き臺にのぼりて、四方をうちながめ給ひしに、烟たえておこらず。つくぐ御心におぼしめすよ、これ民の貧しくして、家に炊ぐものなければならんと、ことぐく、みつぎものをゆるし給ひ、宮殿はあれはて、



仁德天皇高臺より遠望し給ふ

雨露をものしのぎかねたれど、更にいとはせ給はず。數年を経て、また高臺にのぼり、はじめの如く、四方をうちながめ給ひしに、このたびは、烟さかんにたち居たりしかば、あれ、

はや富めり」とて、喜び給ふことかぎりなし。その後、民のこひにより、はじめて、宮殿をつくらしめ給ひぬ。

高どのに、のぼりて見れば、天のした、

四方に烟りて、今どとみぬる。

とは、この時の御事をよみたる歌なり。

天皇、民をあはれみたまふこと、かほどに深かりければ、千年の後の今日まで、ありがたきためしにひきたてまつるも、實にい

れあることにこそ。

### 第八課 佛教の傳來

漢學の渡來してより、二百數十年を経、第二十九代 欽明天皇の御代に至り、百濟より、佛教入り來りぬ。佛教は、印度におこりたる教にて、はやく支那に入り、支那より、更に韓土に傳はりたるものなり。

天皇、群臣を召して、佛を礼拜することの可否を問ひたまひしに、議論二つにわかれ、



大臣蘇我稻目は、これを可とし、大連物部尾  
輿等は、これを否とせり。

蘇我氏は、武内宿禰の後なり。武内宿禰は、  
皇族の御ちすぢにて、景行天皇以下五代  
の天皇につかへ奉り、忠義ならびなかり  
き。さればその子孫たる蘇我氏は、自、重く用  
ゐられて、朝廷の重職たる大臣の職に在り  
しなり。

物部氏は、神武天皇につかへたる功臣

の後にて、はやくより、その家繁昌し、大連と  
なりて、世に重んぜられき。

欽明天皇のころには、右の二大家、ならび  
に朝に立ちて、たがひに威勢を争ひけるを  
りなりしに、たま／＼佛教のことにつき、各  
意見を異にし、遂にはげしく争ふに至れり。

第三十代 敏達天皇の御代に、稻目の子  
馬子、大臣となり、父と同じく佛法を信じ、寺  
などたてたり。然るに、尾輿の子、大連守屋は、

また父の志をつぎ、佛法をしりどけて、馬子に敵し、其の争ますくはげしくなりぬ。

第九課 聖徳太子

聖徳太子は、第三十一代 用明天皇の皇子にして、幼き時より、賢明におはしましき。皇子は、深く佛法を信じ給ひて、馬子とともに、かねて佛をしりどけし守屋を攻めほろぼし、大にこれをおこし給へり。

かくて、皇子は、第三十三代 推古天皇の



聖徳太子

時、立ちて太子となりたまひ、益、佛法をおこ

すことに力を盡し、多くの寺をたて、佛像な

どをつくりたま

ひき。大和の法隆

寺・攝津の四天王

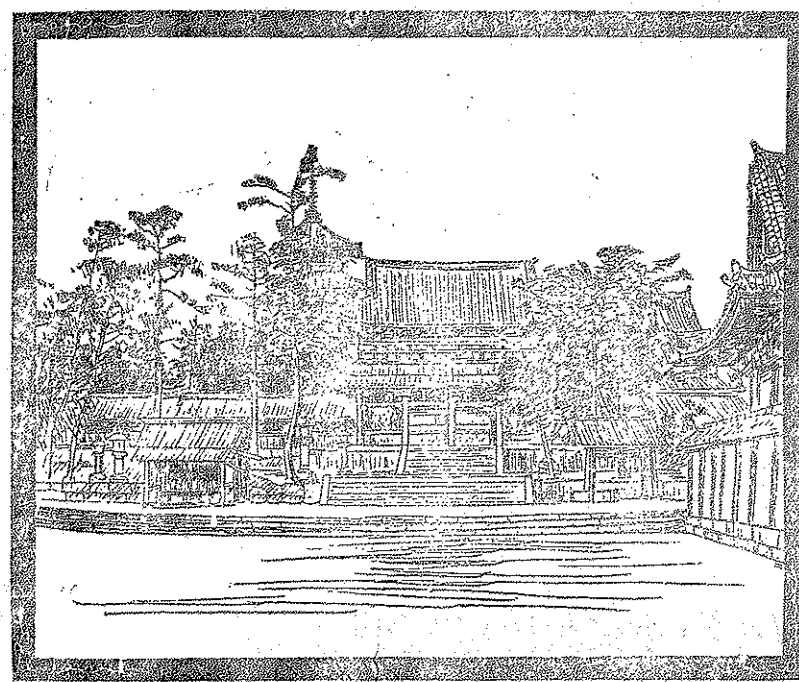
寺の如きは、今に

のこりて、有名な

り。

太子は、また冠

位十二階をたて、



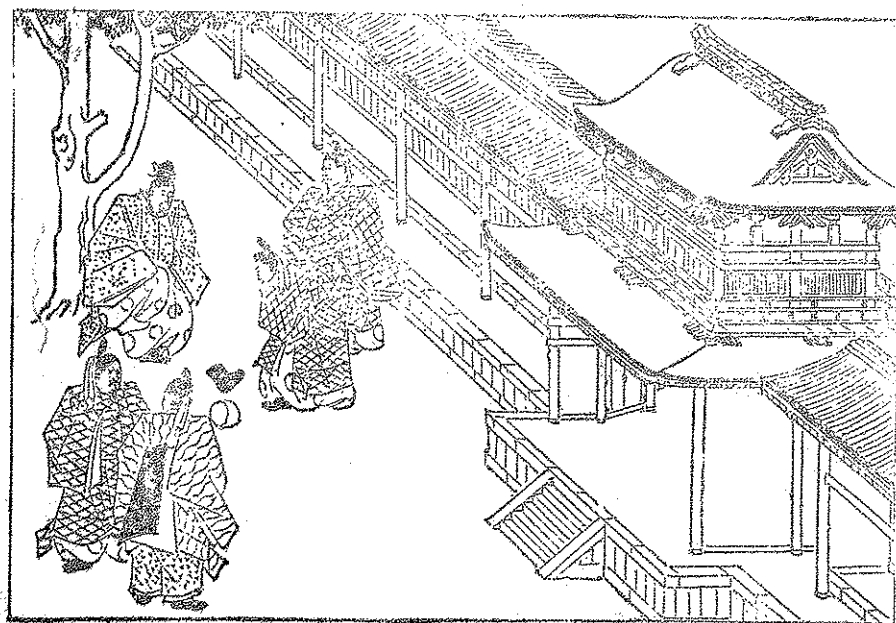
法隆寺

憲法をさだめ、國史をえらび、學藝をひらき  
みちびきたまひしこと、少からず。遠く使を  
支那につかはして、支那とのまじはりをも  
開きたまへり。これより支那との交通、おひ  
く盛になり、彼の國の學問・制度・技藝など  
を傳へたり。

太子は、御位につき給ふに及ばず、御年四  
十九にて薨じ給ひき。

第十課 天智天皇





中大兄皇子等法興寺に蹴鞠し給ふ

第三十八代 天智天皇は、中興の祖とあがめ奉る明君なり。

天皇未、御位に即き給はずして、中大兄と申し、ころ、蘇我馬子の子蝦夷といふもの、父につぎ

て大臣となり、その子入鹿とともに、無礼わがまゝをきはめたり。

ここに、中臣鎌足といふ人、蘇我氏の、あがまゝなるをいかりて、之をほろぼさんと思ひ居けるが、皇子の、なみくならぬ御器量あるをしり、ともに、はかりて、まづ、入鹿を誅し、つぎて、蝦夷をもほろぼしたり。これ、第三十五代 皇極天皇の御代のことなり。

皇子は、第三十六代 孝徳天皇の御代に、

立ちて太子となり、鎌足とともに、天皇をたすけ奉り、大に政をあらため給へり。これ即ち大化の改新なり。大化は我が國にて始めてたてられたる年号なり。

これまでは、大臣・大連をはじめとして、國造・縣主などに至るまで、たいてい、その職を子孫につたへ、土地・人民をしいして、思ひ思ひの政治をほどこし、かば、此の時、それらのものを皆廢し、新にいろ／＼の役所・役

人を置き、役人には俸祿を與へ、又、人民には、一般に土地をわかちあたへ、死すれば、これを取りあぐることにし、土地の廣さ、戸數等に應じて、稻・絹・布等を租税として上納せしむることとせり。

第三十七代 齊明天皇につぎて、太子御位にのぼりたまひ 天智天皇と申す。天皇御即位の後、ほどなく、鎌足やみて薨じぬ。鎌足は、ながき間、天皇をたすけ奉りたる

忠臣なり。病める時、天皇、そのいへに、行幸ありて、大織冠の位をさづけ、藤原の姓をたまはりぬ。大和國塔峯なる談山神社は、すなはち此の鎌足をまつれるところなり。



足鎌臣中



社神山談

# 第十一課 三韓の叛服

神功皇后、韓土征伐の後、役所を任那に置きて、之を支配せしめたまひき。しかるに、新羅、甚、狡猾にして、無礼のふるまひ、いと多く、代々の天皇、常に、この事に、御心を勞したまひ、しばく御使、又は、將士をやりて、さまざまに、さとしつ責めつして、きかざるときは、征伐せしめたまひき。

欽明天皇の頃には、新羅、ますます、勢を得



我が國に、最、うやくしくつかへたる百濟を攻め、又、しきりに、任那をおかし、遂に、之をほろぼして、わが役所をも、うちこはしぬ。その後、數代の天皇、任那の回復に、御心をくだき給ひしかど、その事、遂に成らざりき。

齊明天皇の御代にいたり、新羅、唐の援をかりて、しきりに、百濟を攻めしかば、百濟、救を朝廷に請ひ奉れり。天皇よりて、新羅を征せんとして、皇太子中大兄を隨へ、九州にい

でましゝに、いくほどもなく、行宮に崩じたまひき。

天皇の崩ぜられし後、皇太子、兵をやりて、百濟を援けたまひけれども、百濟遂に亡び、後、數年をへて、高麗も唐に攻め取られぬ。是に於て、韓土は、全く、わが支配をはなれたり。唐とは、かく韓國の事によりて、一たび、兵を交へたれども、間もなく、其の仲なほり、親しく、往來交通するに至れり。

第十二課 文武天皇

天智天皇より、一代をへて、第四十代 文武天皇の御代となりぬ。この天皇も、亦、すぐれ給へる君にして、大化以來の新政をととのへ、兵備を修め、帝都、及、諸國に、學校を立て、史書を撰び給ふなど、善政、甚、多かりき。天皇のつぎは、持統天皇なり。

持統天皇につぎて、第四十二代 文武天皇立ち給ふ。この御代の大寶元年に、大寶律

令成りぬ。今は、政治の本とすべきさだめに、都の政府には、神祇官・太政官・八省などの役所を置き、國・郡には、國司・郡司を置き、役人には、祿を與へ、位を授け、人民は、大化の時のさだめの如く、一樣に、田地を受け、租税を納め、徴兵に應ずべきこと等をさだめ、律は、罪人を罰すべき刑の種類、及、裁判のしかた等を定めたるものなり。この律令は、後に、少しの改正を加へたることあれども、其の大要

は、永く後の世まで行はれたり。

第四十三代 元明天皇、第四十四代 元

正天皇は、共に女帝におはします。元明天

皇の御代に、太安麻呂オホノマロ、古事記を撰し、元正

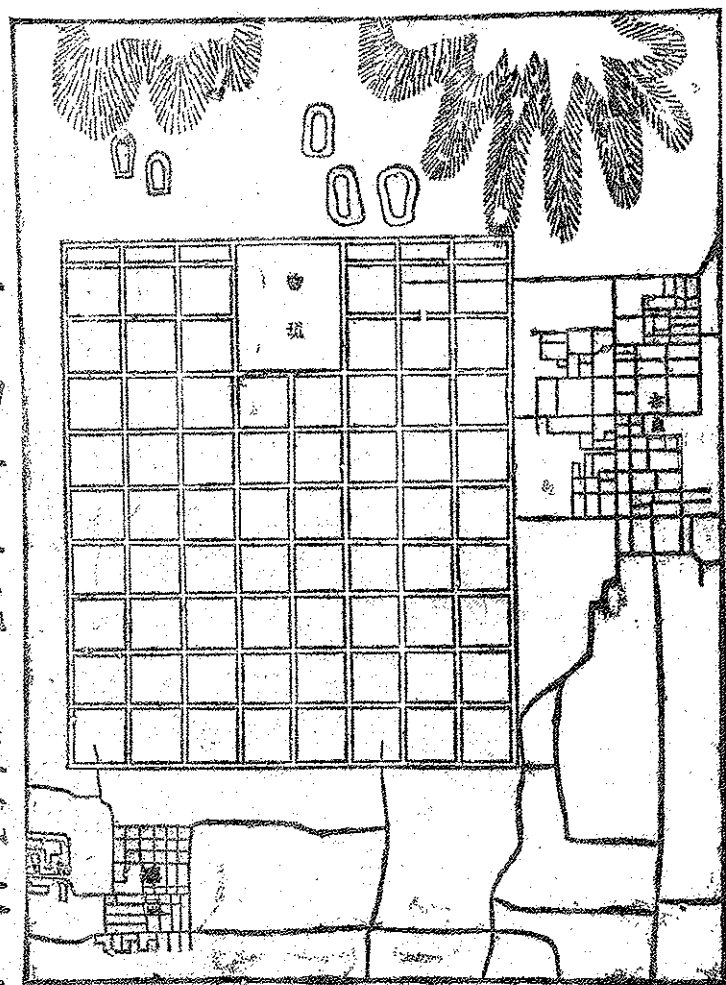
天皇の御代に、舍人親王イノノミヤ、日本書紀を撰した

まひき。

第十三課 和氣清麻呂

第四十三代 元明天皇より、七代七十餘

年の間、大和國奈良に都せられたれば、この



奈良舊都の圖

間を奈良の朝と稱す。佛教の甚盛なる御代なりき。

その中、第四十五代 聖武天皇は、ことに深く佛法を信じ給ひ、諸國に、國分寺をたて、





奈良の大佛

その總本寺  
として、奈良  
に東大寺を  
たて、又有名  
なる奈良の  
大佛を造り

たまへり。

天皇、かく佛法を信じ給ひしにより、僧侶  
は、次第に勢を得て、まゝ、行のよからぬもの

あるに至れり。

第四十八代 稱徳天皇の御時、僧道鏡と  
いふもの、天皇に寵せられて、いきほひ、甚  
盛なりしかば、太宰の主神習宜阿曾麻呂、道  
鏡にへつらひ、宇佐八幡宮のおつげなりと  
詐り、御位を、道鏡にゆづり給はゞ、天下太平  
ならんと奏しけり。天皇、即、和氣清麻呂に  
命じて、更に、神の御教を、こはしめ給ひぬ。  
清麻呂の、出で立つとき、道鏡、清麻呂をま



和氣清麻呂

ねき、汝清麻呂、あれ、もし、大神の、たまふごとく、



護王神社

位に上りなば、汝を太政大臣となさん。もし、たがはゞ、罪に行はんとぞ、おびやかしかる。清麻呂は、宇佐にいた

り、神教をうけ、かへり來て、我が國は、むかしより、君臣の分、さだまれり。道鏡、なにもものなれば、あへて、天位をのどむど。すみやかに誅すべし」と、御つげありしよし、奏しければ、道鏡、大にいかりて、清麻呂を、大隅國に流せり。されど、清麻呂の誠忠によりて、道鏡、つひに、志をはたし得ざりき。次のみかど、光仁天皇の御代に、道鏡を、下野國に流し、清麻呂を、召しかへして、もとの官位を、授け給ひき。

り明治の御代に至り正一位を贈り給へり。

第十四課 桓武天皇

第五十代 桓武天皇の延暦十三年に、都を山城國にうつし、平安の京と名づけ給ひぬ。即、今の京都なり。これより、明治二年に至るまで、七十二代、一千餘年の間、ひきつゞきて、こゝに都し給へり。

これよりさき、東北地方の蝦夷しばく、



桓武天皇の御肖像

とむきしが、此の御代に至りては、すゝみて、駿河國まで攻め來れり。天皇乃、坂上田村麻呂に命じて、これを討たしめ給ふ。

田村麻呂、征夷大將軍となりしより、いかに



坂上田村麻呂

もして、蝦夷どものあとをたち、永く、そのうれひなからしめんと、あまたの兵をひきゐて、之を攻め、殆、餘類なきに至らしめたり。これより、東北地方、おだやかになりぬ。

田村麻呂は、武勇まれなる大將にて、身のたけ、五尺八寸、眼のするどきこと、はやぶさの如く、鬚のたくましきこと、金線をうゑたるが如し。怒るときは、たけき獸もおそれ伏し、笑ふときは、小兒もなれしたしむ。部下の



五十六 會紀  
兵士等、みな其の恩威に服し、おのれの身を  
あすれて、力をつくしたりといふ。

第十五課 最澄及空海

佛教は、奈良の朝に、隆盛を極めしが、桓  
武天皇の頃に、最澄<sup>サイチ</sup>及空海<sup>ウツミ</sup>といふ二名僧、出  
てしより、一層、廣く世に行はるゝに至れり。  
最澄は、桓武天皇の延暦二十一年、唐に  
留學し、歸朝の後、天台宗<sup>テウタイ</sup>をひろめ、比叡山に、  
延暦寺を建てたり。後に、傳教大師<sup>デンキョウ</sup>とおくり



澄 最 海 空

名せられき。

空海は、名高き弘  
法大師なり。學問博  
く、よろづのわざに  
達し、書畫・詩文にた  
くみななるのみなら  
ず、醫藥・測量・彫刻等  
の術に、くはしかり  
き。嘗、最澄と同年に入唐し、眞言宗<sup>シンゴン</sup>を學びて

歸り、第五十一代 嵯峨天皇の御代に、紀伊の高野山に、金剛峰寺を建てたり。

これより先、奈良の朝に、僧行基といふ者、始めて、神佛同體の説をとなへしが、最澄・空海は、益、其の説をひろめ、我が國人の敬神の心をうつして、佛に向はしめしかば、これより、佛教は、益、深く人心に入るに至りぬ。

第十六課 藤原氏の攝政關白

桓武天皇より數代をへて、第五十五代

文德天皇の御代となる。この 天皇は、左大臣藤原冬嗣の女の御腹なりければ、藤原氏の勢、これより漸、盛になりぬ。

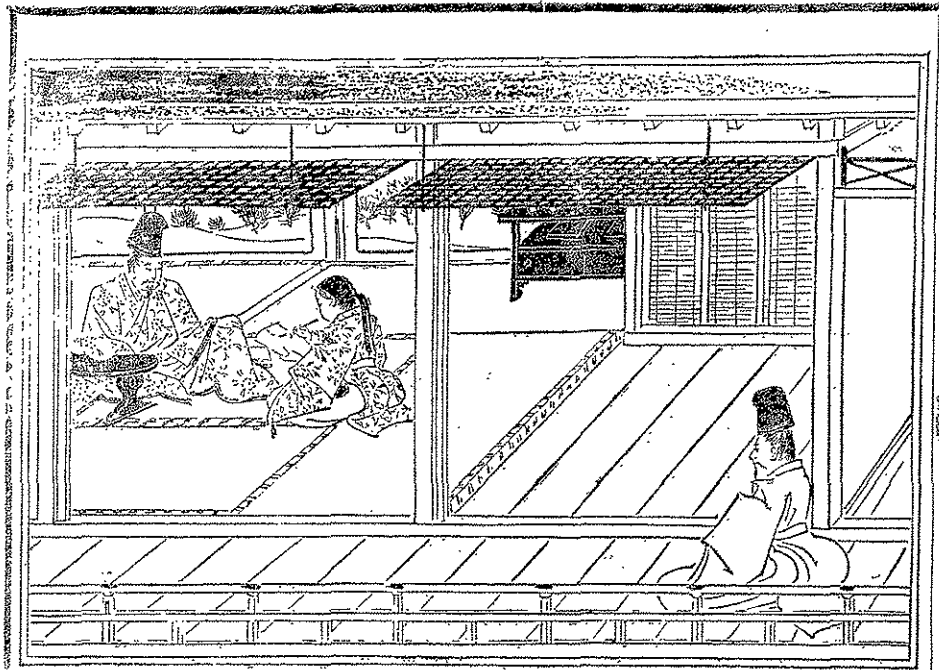
はじめ、藤原不比等、父鎌足の大功をたてし後をうけ、持統天皇以下の四天皇につかへ、大寶律令の撰定にあづかりて、功あり。また、皇室の外戚となりて、おひく、勢を得。遂に傳へて、冬嗣に至れり。冬嗣は、不比等四世の孫なり。

文德天皇の御代に、冬嗣の子良房、人臣を以て始めて、太政大臣に任ぜられ、その女はまた皇后となりて、清和天皇を生み奉れり。清和天皇は、御年僅に、九歳にして、立ち給ひければ、良房、外祖を以て、政を攝したり。これ、人臣の攝政のはじめなり。これより、政治の權、次第に藤原氏の手につり、朝廷の重職は、たいてい、その一門の占むるところとなり、第五十九代 宇多天皇の御代に、良房

の養子基經ヤシツネ、始めて、關白に任ぜられたり。

第十七課 菅原道真

世に天滿宮、又は天神様となへて、あがめまつる神は、菅原道真スガハラミチマサなり。菅原氏は、はじめて埴輪を造りし野見宿禰の後にて、數代このかた、學問を以て、朝廷につかへ奉れる家なり。道真、幼き時よりかしこく、年長ずるに及びて、學問ひろく、徳高く、殊に政治の道に明なり。



菅原道真の時効

宇多天皇、道真の  
器量を重んじ、参議  
に任じて、重く用ゐ  
給へり。つぎのみか  
ど 醍醐天皇の御  
時、道真、右大臣に任  
ぜられしが、基經の  
子左大臣藤原時平、  
これをねたみて、

天皇にざんげんせしにより、道真は、つひに、  
太宰権帥におとされたり。

されど、道真は、すこしも、君をうらみ奉る  
心なく、君をしたひ、都を思ひ、詩を作り、歌を  
よみなどして、月日をおくりたり。

よひの間は、都のそらに、すみぬらん。  
こゝろつくしに、ありあけの月、

その誠忠のほど、なにかたとへん。かく  
て、五十九歳にして、其の處に薨ぜられぬ。世





菅原道真

の人、其の志をあらはれと思はざるものなく、社を

京都の北野にたてゝ、これをまつり、又、朝廷よりは、正一位、太政大臣を贈られたり。

第十八課 天慶の亂

第六十一代 朱雀天皇の御代に、平將門

といふものの、むほんし、下總の相馬により、新皇と稱せり。

この時、將門の友、藤原純友、伊豫にあり。將門と約し、兵をおこして、これに應じたり。かく、東國に、南海に、一時に、事おこりしかば、人のおどろき、いはんかたなし。

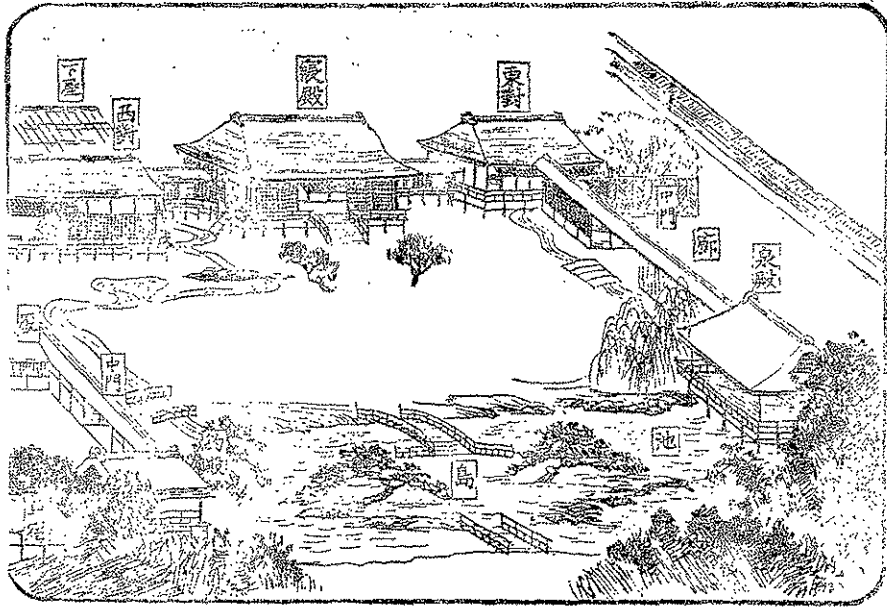
朝廷、藤原忠文に命じて、まづ、將門をうたしむ。忠文、未、いたりつかざるに、將門の從兄平貞盛・田原藤太秀郷と兵を合せ、うちて、將

門を誅せしかば、忠文は、途よりかへりぬ。

純友は、いきほひ、一時、盛なりしが、將門の誅せられし後、いくほどもなく、源經基等、討ちて、之を誅したり。これを天慶の亂といふ。この亂より、貞盛・經基、軍功のほまれ高く、源平兩氏の武名、やうやくあがれり。

### 第十九課 藤原道長

第六十二代 村上天皇、天慶大亂の後をうけて、御位にのぼり、御心を政治にとゞぎ



藤原時代の邸宅

たまひけるが、此の頃より、藤原氏のわがまゝ、益、甚しくなりて、その一族にあらざれば、高官にのぼることを得ず、その腹にあらざれば、皇太子にも立つことを得ざる有様と

なりぬ。

藤原氏の攝政・關白・大臣等は、たいてい、おごりわがまゝを極めたるが、中にも、最、甚しきは、道長なり。道長は、第六十六代 一條天皇より、三條天皇をへて、後一條天皇の御代に至るまで、三代、三十餘年の間、天下の大政をにぎり、四帝の後妃は、皆、その女にして、その身は、三帝の外祖となり、藤原氏の尊榮、前後にたぐひなかりき。道長、嘗、歌を詠じ

て曰はく、

この世をば、わが世とぞ思ふ。もち月の、

かけたる事も、なしと思へば、

と、その不足なきさまを想ふべし。

道長の榮華をきはめし頃、紫式部・清少納言など、和歌・和文にたくみなる才女出でたり。紫式部は、ひろく和漢の學問に通じ、諸藝にも秀でたれども、自は、少しもほこる色なく、品行の正しきこと、當時、まれに見る所な

り。その著せる源氏物語は、和文の手本として、今もなほ、世にもてはやさる。この物語と並べ稱せらるゝは、清少納言の枕草紙なり。清少納言は、學問深く、雪後に御簾をかかけしことにて、才名頗高し。

### 第二十課 前九年の役

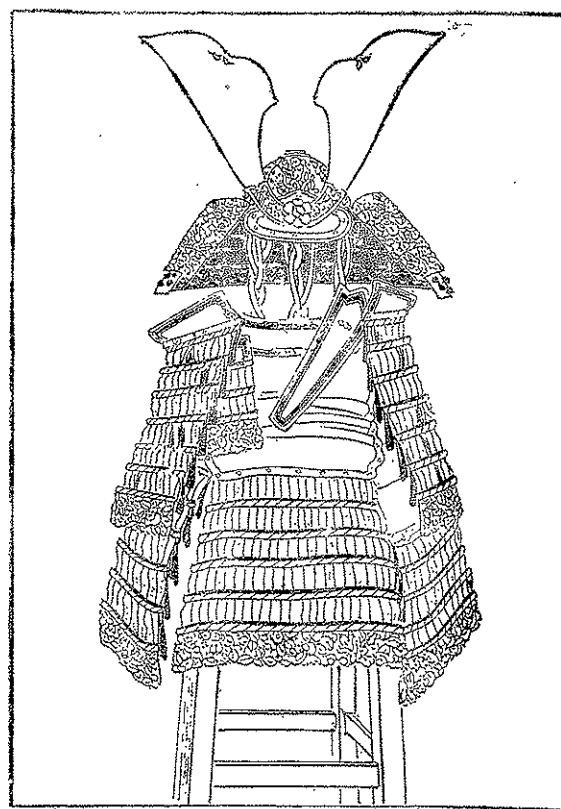
第六十八代 後一條天皇の御代に、平忠常<sup>ツネ</sup>、上總下總に據りてむほんしけり。忠常、勢甚強かりしが、源經基の孫賴信<sup>ヨシノブ</sup>、おほせをう

けたまはり、直に討ちて、これを降したり。

忠常の亂後、二十年をへて、第七十代 後冷泉天皇の御代に、また安倍賴時<sup>ヨシトキ</sup>、及其の子貞任<sup>サダノブ</sup>の亂あり。賴時は、陸奥の豪族にして、衣川<sup>ガハ</sup>に據りて、威を振ひ、國守の力も、これを制すること能はざりき。よりて朝廷にては、賴信の子賴義<sup>ヨシヨシ</sup>を、陸奥守として、これを討たしめらる。

賴義の子義家<sup>ヨシイハ</sup>は、幼名を八幡太郎といふ。





源義家の鎧

家とともに、兵をひきゐてすゝみしに、陸奥の人民、風をのどみて、之にしたがひ、頼時も、亦、くだれり。

武勇たぐひなく、弓の名人なり。この時、年わかくして、軍に従へり。頼義、義

既にして、頼時、またとむきければ、頼義、せめてこれを誅しき。されど、頼時の子貞任のいきほひ、なほ強くして、官軍、しばく利をうしなひしが、頼義、いよく志をはげまし、出羽デハの豪族清原武則キヨハラノタケノリを味方につけ、ともに貞任をうちて、之を誅したり。この戦、すべて、九年にあたりしを以て、前九年の役といふ。

小學國史卷一終

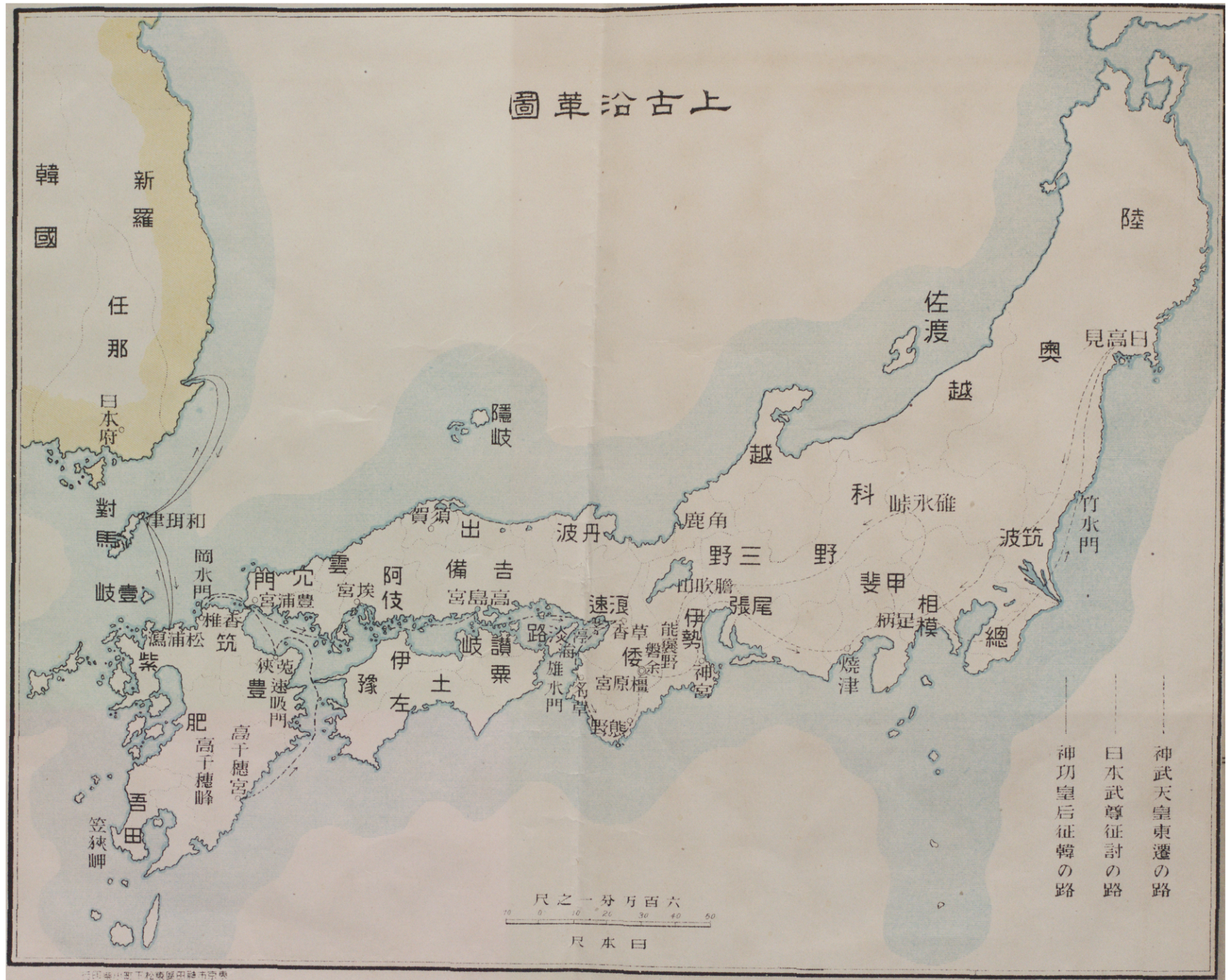
小學國史

卷一

館普及舍



# 上古沿革圖



明治三十四年十一月一日  
文部省檢定濟

明治三十三年十月廿三日  
全三十三年十二月廿四日  
全三十三年十二月廿四日  
全三十三年十二月廿四日  
全三十三年十二月廿四日

國史製附

(價定)	
卷一	金貳拾錢
卷二	金貳拾錢
卷三	金貳拾錢
卷四	金貳拾錢

編者  
東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍編輯所

發行兼印刷者  
東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍



代表者  
右 社長  
山田禎三郎

發兌元

東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍



